

## 二十年

尾崎暢映

古代文学会の活動は、昭和三十五年一月に始った。私は、この会の結成の発議者ではない。賀古明さんに誘われるままに、有志が森淳司氏のお宅に集り、発会について相談しあった時の一人にすぎない。本会発足の事情は、『古代文学』創刊の辞に

本学会の生誕における基本的希求は、今日の学界に伏在する、学閥・学統、その他、人事関係に起因する、研究・発表に対する俗世間的障害のすべてを除くことによって、学問研究における、もっとも純粹にして、真摯・自由な研究を専一に推進せしめ得る場を出すことである。

とあるに尽きる。ただ私自身について言えば、「もっとも活潑に、新鮮・重厚な研究を発表し、推進して」来たかどうかということになれば、所期の成果をあげ得たとは到底申せない。今後の努力に期するほかはない。

月例研究会は本会の発足と同時に始ったものの、当初のこととして『古代文学』が出せなかった。どうにか創刊号を出したのは、翌三十六年十二月になってからであった。以後、毎年刊行して今日に至っている。無論、月例会を欠いたことはない。例会の会場は、最初は春日町の都電の停留所近くの某会社の一階であった（無料でお貸し下さったのに、その会社の名を忘れてしまって、大へん申し訳なく

思う）が、のち、明治書院、明治大学和泉校舎、東京都教育会館などを借りるようになった。桜楓社、和洋女子大附属九段高校、東洋大学、早稲田大学などにも、一時お世話になったことがある。

○

本会々員で故人となられた方には、前野貞男、佐伯仁三郎、鵜殿正元、谷馨、大久保正の諸氏がある。前野氏は、国会図書館に勤められた。『古代文学』の原稿をいただく為に私が国会図書館に出むいたのは、その関係からだった。氏は口頭発表の時も、一字の書き損じもない原稿を机上に置き、それによって発表された。万葉集の訓点史の研究に打込まれたのが主な業績であろうが、『上田秋成の万葉学』『万葉動物歌論考』のような著作もある。『万葉動物歌論考』の序歌に「万葉にぬかづく吾を由なしと人に云はせて思ひなみかも愁ひなみかも」の詠のあるのを見ても、氏の万葉への傾倒ぶりがわかる。ついでを以て言えば、岩波古典大系の近世和歌集の一部なども、氏の協力に成る。氏からは、御著書の大部分を戴いている。次に佐伯氏のことを一言。佐伯さんはいつも、例会の席では笑顔で話しかけられた。いずれかと言えば、氏の関心は、研究方面よりも短歌の創作にあるように見うけられた。偶然に国電の目白駅でお会いした時、これから窪田（空穂）先生のところへ伺うのですと言われた。これも、そのこととの関連からだったろうと思う。氏のことは、同じく相模女子大に勤められた浅野信氏がよく知っておられる。鵜殿氏からは、いつも快活で率直な印象をうけた。氏の主著は『古風土記研究——常陸国風土記——』であった。同学の先輩であった関係もあって、長逝されるまで私はお世話になっ

た。昭和四十七年の年賀状には「インドの各地での仏蹟見学では、四十度を越す暑さに苦勞しました。しかし、各国民族の生活慣習に接した体験は、私の研究に大きなプラスとなりました。本年は私の本卦還りの年になります。……まだまだ若い積りで張り切っています」とあったのに、間もなく不帰の客となられた。晩年は沢山の小鳥を集めて飼ひ、会えばその話をされた。谷馨氏は、研究者と歌人とを兼ねられた。氏の研究業績には『額田王』、その他がある。本会々員として、桜楓社の一室で額田王関係の発表をされた帰途、卑見をお聞きとり下さったことなどが切なく思い出される。昭和四十三年の年賀状には「今年もいよいよよい御仕事をなされて下さい。昨秋、左に転居いたしました。都下狛江町覚東四五〇、谷馨」とあった。氏の後年の勤務先は早大であったと思う。大久保正氏の御長逝は、全く突然だった。痛恨のきわみである。森淳司氏と私が命ぜられて、昨秋は上代文学会のシンポジウムの講師をお願いしたところ、快くお引きうけ下さったのだった。そして本年三月二十八日の来書に「シンポジウムの折は御教示にあずかり、有難く存じました。記憶はございましたので折口先生の御論文読みなお記しましたが、特に御教示にあずかった旨は記しませんでしたが、ご学恩によるもので……とあった。これが、私のいただいた最後のお便りであった。氏の著作・学問・お人がらについては周知のことです、ここに贅する要はない。ただ、東京外語大助教授から北大教授に転ぜられたときは、栄転とはいえ、遠く北に去るのがよほど寂しかったらしい。「これからは時時おたよりを下さい」と言われたのが、今も忘れられない。故尾山篤二郎氏の門に参じて歌も作られて

いたことは、亡くなられてから知った。

○

古代文学会々則の第六条は、はじめ「本会の運営は、会員全員の会議によることを原則とする」とあったが、昭和四十年になって「会員全員」を「委員全員」に改めた。これは、会員の増加に対応した当然の改則だった。こうした事情で、本会には会長とか代表とかいうものはない。今日まで、この行き方や会員間の人間関係やに違和を感じる人はなかったと思う。例会以外については、研究発表大会、夏期セミナー、古代文学講座、研究シリーズの刊行なども、それぞれの担当者のひたむきな努力と協調によって、順調に進捗している。その中心は、事務局にある。この行き方は『古代文学』創刊の辞に言うところに沿ったもので、一つの見識であろう。一会員として、将来もこの方針で進むことを願っている。(昭五五・八・三〇)